

## C 十三湊遺跡隠居地点出土の遺物

十三湊遺跡の南方、俗称「隠居跡」と呼ばれる場所は伝檀林寺跡とされている。(以下、便宜上隠居地点と呼称することにしたい。)ここは現在、中島製材所の裏手に当たり、一帯は松林による防砂林に覆われ、遺跡の確認が困難な状況にある。この遺跡は昭和15年頃、大戦中の食料増産のため、この地区を開墾した際に礫石が出土したことから発見されたという経緯をもつ。また、その前後する時期に五輪塔、金銅製の懸仏、茶臼が出土している[豊島1984]。そして、昭和51年の桜井清彦氏(当時早稲田大学教授、現昭和女子大大学院教授)によって、初めてこの隠居地点の考古学的調査が行われている。

今回、筆者はその調査時で出土した陶磁器を分析する機会を与えられている。出土した陶磁器をみると、量的には少ないが、中世から近現代のものまで含まれている。ここでは中世の陶磁器を取り上げて分析し、隠居地点の成立年代、及び十三湊における都市的位置づけについて若干ふれてみたい。

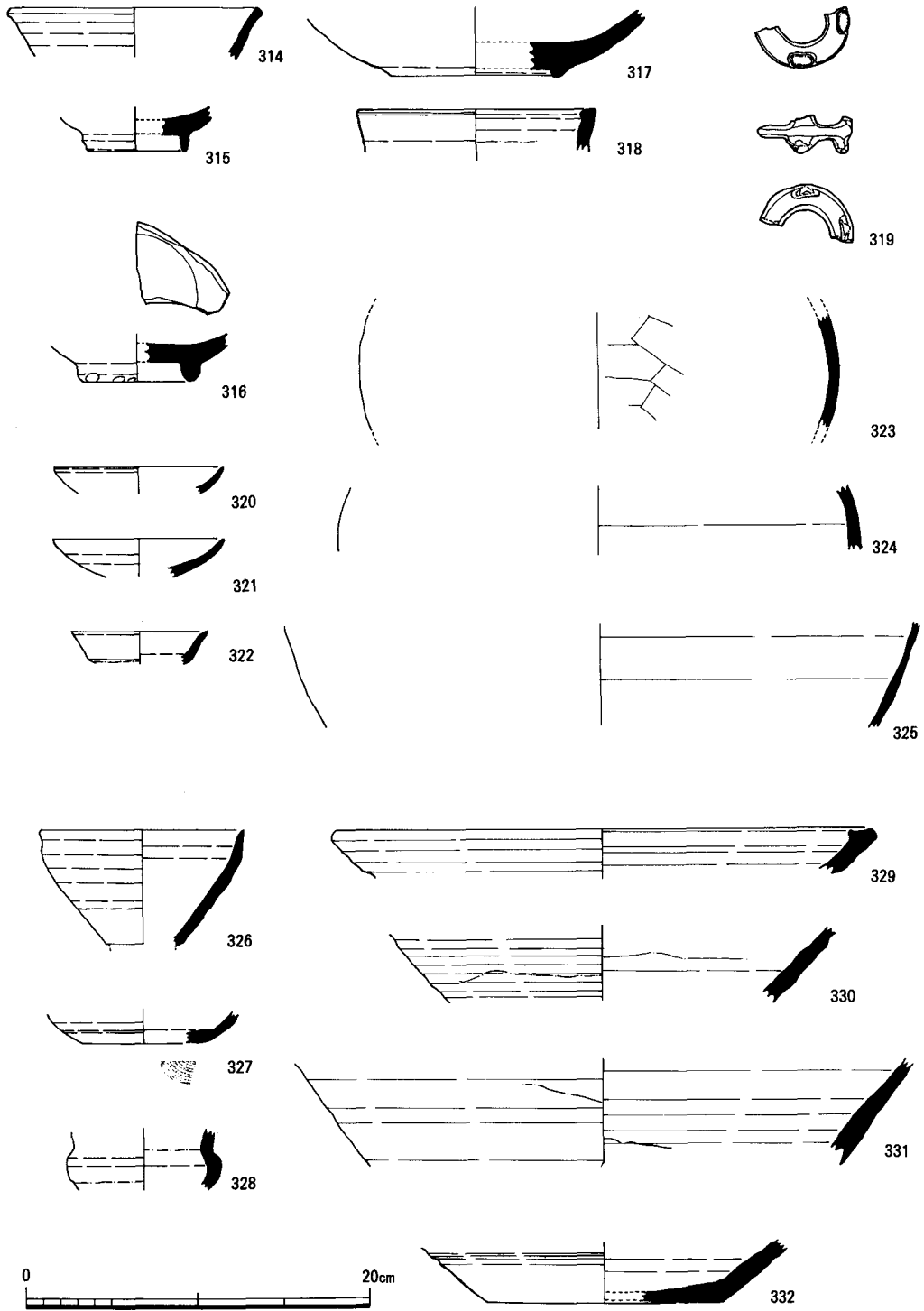
### 1 遺物の概要 (第100・101図, 図版76・77)

中世の遺物は第13表に示したとおりである。ここでは図化可能な陶磁器を取り上げている。また、国産陶磁器の瀬戸、珠洲の時期等が判別可能なものについては、それぞれ藤澤編年[藤澤1991]、吉岡編年[吉岡1994]に従っている。同様に輸入陶磁器の青磁、白磁では、それぞれ上田分類[上田1982]、森田分類[森田1982]に従っている。以下、輸入陶磁器、国産陶磁器の順で記述する。

314~316は龍泉窯系の青磁碗である。314は口縁部破片である。内外面無文で、口縁部が端反るタイプのものである。上田分類のD類に当たる。315・316は底部破片である。315は高台はやや高く作られ、断面はやや三角形を呈する。畳付から外面底部は露胎と思われる。比較的薄く釉がかかるが、鈍い緑色を呈する。316は断面四角形の高い高台をもつ。全体的に器壁も厚い。釉は比較的厚いが、透明感のある緑色を呈する。高台内は露胎であるが、畳付には釉が付着している。

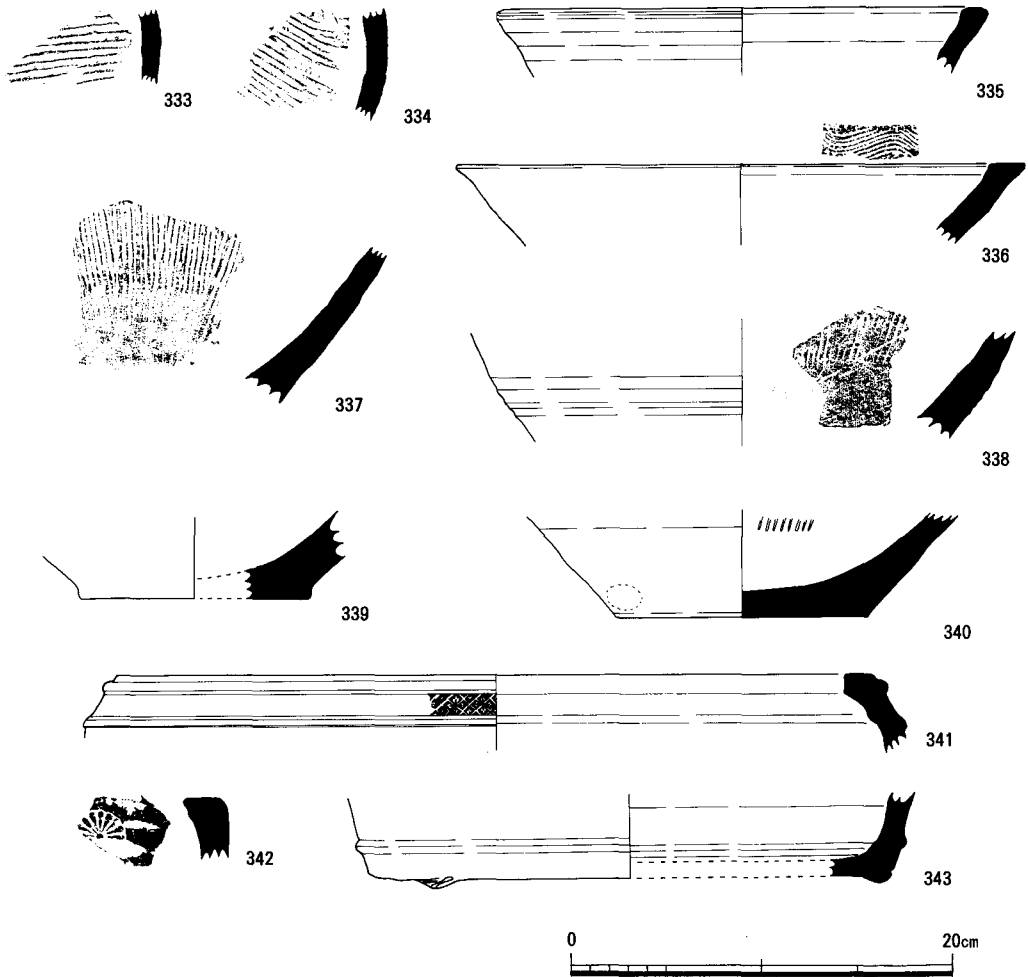
第13表 十三湊遺跡隠居地点出土の中世陶磁器の種類・器種別組成

種類	器種	破片数
瓦質土器	火鉢	53
国産陶器		
珠洲	壺	2
	すり鉢	6
信楽	壺	21
瓷器系	壺	1
国産施釉陶器		
瀬戸	天目碗	3
	皿	1
	盤	10
	香炉	1
	不明	6
国産陶磁器	合計	104
中国製磁器		
青磁	碗	15
	盤	2
	香炉	1
	器台	1
白磁	皿	5
	小坏	1
	不明	2
中国製陶器		
	天目碗	2
	褐釉壺	15
船載品	合計	44
総計		148



遺物番号は図版に挙げた遺物からの通し番号としている。第101図も同じ。

第100図 十三湊遺跡隠居地点出土遺物実測図(1)



第101図 十三湊遺跡隠居地点出土遺物実測図(2)

317は龍泉窯系青磁盤の底部破片である。焼きが悪く、胎土は赤褐色を呈する。釉は比較的厚く、鈍い緑色を呈する。高台内は露胎である。

318は龍泉窯系青磁盤の筒形香炉の口縁部破片である。焼きが悪く、胎土は赤褐色を呈する。釉は比較的厚く、鈍い緑色を呈する。

319は龍泉窯系青磁盤の香炉の器台破片かと思われる。半分に欠損しているが、おそらくリング状をした器台に4本の脚があったものと思われる。置付は釉剥ぎされている。釉は比較的厚く、鈍い緑色を呈する。胎土は部分的に赤褐色を呈し、焼きが悪い部分がある。

320・321は白磁丸皿の口縁部破片である。森田分類のD群に当たる。15世紀前半代のものである。

322は白磁小坏の口縁部破片である。体部下方が腰折れになっている。森田分類のD群に当たる。15世紀前半代のものである。

323～325は中国製褐釉陶器壺の体部破片である。内面をハケ状工具で調整したのち、錆釉状のもので化粧がけしている。

326は瀬戸天目碗の口縁部破片である。体部はほぼ直線的で口唇部がくびれる。高台周辺には、濃い錆釉が施されている。古瀬戸後Ⅱ期に含まれる。

327は瀬戸縁釉小皿の底部破片である。底部外面には、回転糸切り痕が明瞭である。底部内外面には釉が施されていない。

328は瀬戸袴腰形香炉の体部破片である。外面には灰釉が施されているが、二次焼成を受けている。

329～332は瀬戸折縁深皿である。329は口縁部破片で、口縁部内面に小突起が形成される。釉は灰釉が施される。古瀬戸後Ⅳ期（新）に含まれる。330・331は体部破片である。332は底部破片である。内面見込みは露胎である。外面底部は回転糸切り痕がわずかに見られる。

333・334は珠洲壺の体部破片である。叩き目は3cm幅で7条と粗い。焼成は還元硬質で灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に含まれる。

335・336は珠洲すり鉢の口縁部破片である。335は口縁基部を強く押さえて、端部を把厚させ、水平に面取りしている。胎土は粗いが、還元硬質で灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に含まれる。336は口縁端部を水平に面取りしているが、端部に櫛目波状文帯をもつものである。胎土は粗いが、還元硬質で灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に含まれる。

337・338は珠洲すり鉢の体部破片である。337は卸し目が隙間無く施されている。胎土は粗いが、還元硬質で青灰色を呈する。338は卸し目の幅が3cm、条数が10条となっている。両者とも珠洲Ⅴ期に含まれる。

339・340は珠洲すり鉢の底部破片である。内面見込みは使用されていて、摩滅している。焼成りは還元硬質で灰色を呈する。

341～343は瓦質土器の火鉢である。341は2帯の突起の間に花菱文のスタンプが施されている。焼成は酸化軟質で、橙色を呈する。342は菊のスタンプが施されている。343は底部破片である。体部下方に1帯の突起をもつ。胎土は緻密であるが、あまい焼きである。

## 2 出土陶磁器から見た隠居地点の様相

中世遺物から見た遺跡の年代は14世紀末～15世紀中頃に当たるもので、ほとんど15世紀代のものと考えられる。これらは十三湊遺跡の最盛期（15世紀代）で出土する陶磁器類と同様の傾向を示している。つまり、青磁、白磁、瀬戸を中心とする碗皿類の食膳具、珠洲の壺、甕、すり鉢を主体に若干の瓷器系を含む貯蔵具・調理具、瓦質土器などの火鉢の暖房具を使用していることである。

以上のような日常雑器類の他に、この地点で特に注目されていることは青磁の香炉（器台）、瀬

戸の袴腰型香炉，中国製褐釉陶器などの宗教具，奢侈品が多く出土している点である。また，かつて五輪塔，金銅製の懸仏，茶臼が出土していることもあり，宗教施設であることは間違いないであろう。

隠居地点の調査面積は，全体の範囲に比べ極くわずかであり，断定は避けなければならないが，この地点における宗教施設の成立は十三湊Ⅱb期以降（15世紀以降）に求められる。つまり，町屋地区の整備に伴って，港湾都市十三湊が都市的様相を呈する段階に町屋地区の南端周縁部に宗教施設として成立したものと推察したい。

〔参考文献〕

- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2，日本貿易陶磁研究会。  
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁器の分類について」『貿易陶磁研究』No.2，日本貿易陶磁研究会。  
豊島勝蔵 1984 「檀林寺遺跡」『市浦村史』第1巻，市浦村教育委員会。  
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ -古瀬戸後期様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館。  
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館。

(榊原滋高：市浦村教育委員会，国立歴史民俗博物館特定研究協力者)